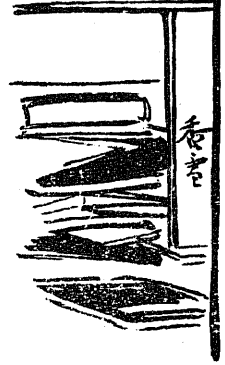


第十卷第十號



ぬくもり

圖畫科の衛生に就いて

文學士 菅原 教造

一、圖畫教育の意義

圖畫を生理學的に研究すると云ふことは、兒童教育上に餘程大切なことであるのに、歐米諸國に於いても、其の研究が十分に發達して居るとは云へないので、我が國にあつても、坊間行はれて居る圖畫教育の著書で、此の點に觸れて居るものは極く稀れであつて、甚だ遺憾な次第である。今、私の紹介しやうとする説は、多く亞米利加のバーナム (Burnham) 氏の意見であるが、我が兒童教育家の參考となる點が決して尠くはないと思ふのである。

バーナム氏は此の研究の必要を力説して、「圖畫の生理學上の立脚點が決つて居ない爲めに、種々拙惡な教授法が行はれ、其の弊が惹い

て言語の發達を妨げて居る點が尠くない。」と論じて居る。實際心理學の上から考へても、兒童の思想や感情を忌憚なく外部に表すこと、例へば怒つた時は、怒つた感情を偽らずに顔に表すとか、嬉しい時は嬉しい表情をするとか、恐い思をした刹那には、其の感じを直ぐ外部に表すと云ふやうな習慣を養ふことが大切なことである。これは日本の兒童には殊に必要であつて、我が國では古い道徳思想から來て、喜怒哀樂の情を顔に表はさないことが、武士のたしなみであるとか、人の修めねばならぬ道であるとか云ふやうな誤つた考へから、表情といふことを非常に卑んで來たもので、例へば、「お腹が減いても、飢うない」と云つた千代萩の千松の如きは、武士の典型であり、修養の極致であるかのやうに考へられて居たもので、其の弊が、微細な人間の感情を尊ぶことを知らないで、徒らに之れを卑むやうな習慣を作り、一方には機能の發達を害して居る點が多いのである。日

本人が一般に西洋人に比べて、顔や動作に表情の鈍いのは、全く此處から來た弊である。それでは何故に人の感情を尊び、之れを外部に表すことを重んじなければならぬかと云ふことは、後に説明することにして、兎に角、兒童の感情を尊ぶといふことが、應て兒童を尊ぶといふことになるのであるから、總て兒童に課する運動神經の訓練といふものは、直接に内部思想の表出を助けて行くものでなくてはならぬ。で、圖畫教育も同様の目的から出て居るものであるから、之れに依つて兒童の思想や感情を表すやうに努めねばならぬ。

二、思想發表の手段

兒童の偽らざる思想や感情は、其の自發的活動に最も能く現はれて來るものであつて、例へば喜怒哀樂の情が顔色に現はれるなども其の一である。兒童は乳兒の時代を過ぎて、自由に歩いたり、駈け廻つたりするやうになると、自分の思想や感

情を發表するのに、泣いたり、身振りをしたりするやうな表情の仕方と違つた、新たな方法をとるやうになる。第一に馬であるとか、犬であるとか、犢であるとかいふやうな動物の歩き方を真似たり、其の聲を真似たりするのは、皆、動物に就いての知識なり、考なりを發表する手段である。第二に來る方法は、言語に依るものであつて、實物から取つた寫生でも、想像で作り出したものでも皆、お話などで表すやうになる。第三は手の動作で思想を發表する方法である、即ち紙細工などは其の一つである。此のやうに、いろ／＼違つたやり方で思想を發表するやうになつてからも、最初の身體を動かして自分の考へを發表する方法は、矢張り其の儘に續けて行くもので、この第一の方法は應て生涯の心的生活に著しい關係を及ぼして來るものである。

かう云ふ思想發表の方法と云ふものは、餘程季節の影響を受けるもので、夏は紙細工のやうなも

のは、餘り好まないで、動物を現す場合でも、多くは果物や野菜でそれを作るものである。又、夏は兒童の戯曲本能が充分に表はれる折が多いもので、お馬ドウ／＼と云つたやうな、餘念なき馬ごつこに楽しい夏の一日が過ごされるのもそれである。

斯様に兒童の運動と云ふものは、取りも直さず思想發表の一段であるから、最初兒童に課する遊戲は、勿論自發的遊戲で、次に體育的、若しくは戯曲的遊戲に移らなければならぬ。そして繪畫も亦、これと同様な遊戲の一つであつて、繪畫の中には矢張り、自發的、體育的、戯曲的の差別が表はれるものである。

三、圖畫教育の目的

圖畫の教育は何を目的とするものであるかといふことは、これ迄にいろ／＼な方面から論せられて居るが、多數な論者の歸する處は、美術教育の

手ほどきと云ふ點と、其他、視力と運動神經の啓發と云ふことである。然し生理學上から論ずる場合は、圖書を思想發表の一の機關と見て、兒童の思想や感情を外部に發表する爲めに、圖書を課するといふことが主要の目的となつて居る。それ故に、生理學上の目的には、圖書の有害部分を選いやうとする消極的の意味と、思想發表の一方と云ふ積極的の意味との二面がある。で、第一の消極的の目的が、教育實際家に取つて直接の關係があることであるから、先づ此の點に就いて少しく説明を試み度いと思ふ。

四、衛生上の注意點

圖書の授業を行ふ場合の法則は、習字の場合と餘程似通つた所があるけれども、思想發表の手段としての圖書は一般に習字の先きに來るものであるから、衛生上の點に就いては、殊更りに深い注意を拂はねばならぬ。

先づ圖書教室内の注意としては、(一)椅子と机は兒童の身丈に適當したものであること、(二)兒童の身體と手の位置が正確であること、(三)鉛筆は長いのを要すること。(四)兒童の目は机と黑板から適當の距離を保つこと。(五)黑板に書く繪は單純のものを選んで、お供の餘分の圖を多く書かぬこと、(六)光線のハツキリしない場合には授業を見合すこと、(七)教室内には人工燈火を避けること。(八)若し止むを得ぬ場合には室内の所々に澤山の燈火と、生徒の机に各々一個のランプを與へること。(九)色鉛筆を使ふ場合は、それを口に入れたり、指尖きについた色をなめたりすることのないやうに注意すること等であるが、一般に兒童は他の課目よりは圖書の時間に興味を持つもので、その爲めに自分の位置なり周圍なりを忘れて騒ぎ易いものであるから、姿勢を正確にして授業することが餘程大切である。更らに二三の重要な點を項を分けて略説すれば。

(一) 運動神経の訓練

總の運動神経の訓練は、要するに兒童の腕と手を發達せしめる目的を満足せしめると云ふ點と、それから兒童の本能から來る思想發表を充分に遂げさせると云ふ點、即ち兒童の自發的活動の範圍に制限すべきものであるから、繪畫もまた、其の範圍を出で、無暗に精密な繪や、六ヶしい畫を課してはならない。これは生理學上からも、又心理學上からも同様の法則が立つのである。

(二) 初學年の時期

圖畫の授業は何歳から始むべきであるかといふことは、いろいろ異つた意見が行はれて居て、獨逸では規則的に此の科目を課するのは十歳からで、佛國では獨逸よりも比較的早く課することに於て居る。然しそれよりも大切な問題は、其の仕事の種類と方法とであつて、若し其の仕事が單純で、自由で、而も其れを課する時間が短かければ、幼稚園の兒童に課しても、決して差支はない

のである。先きにも述べたやうに、兒童は自發的繪畫の上に、自分の思想や感情を有りの儘に表すものであつて、其處に大なる教育的價值と、衛生上の意味がある譯である。

又、藝術的能力と云ふものは、幼少の折に既に現はれて來ることが、何も變則であるといふことは決して出來ないが、唯一に注意すべき點は、其の能力は成人か教へ込んだのではいけない。兒童の自發的のものでなければならぬといふことである。それであるから、圖畫の法則や技巧を教へると云ふやうなことは、決して十歳や十二歳の兒童に課すべきものではないので、さう云ふ意味の教育は、寧ろ兒童の繪畫に對する興味を害するばかりで、何の利益にもなならない。バーネス(Barnes)教授は、兒童が繪畫の技巧に興味を持つやうになるのは、餘程後のことであるといふ事を證明し、且つ初年度の兒童に繪畫の法則を強ゆるのは、繪畫の先天的興味を破壊するものであると論じて、

大に之れを戒めて居る。これに依つて觀ても、八歳乃至十歳の兒童に課する圖書は、飽く迄も自發的のもので、且つ子供の自由に任せて置くべきものであることが、理解される。

五、圖書教育の順序

圖書の授業は最初、どう云ふ圖から始めなければならぬかといふ事も大切な問題である。兒童の自發的活動は最も教育的な活動である、偉大な自在な、そして生理的な活動である。時期は極めて短いけれども、非常なる熱中を以て働き、そして注意の深淺の差が著しい活動であつて、この活動の産物は即ち生活である。行爲である。これに反して成人の體育は、飽く迄も形式的、數學的、機械的であつて、幾何學的な技術から始まつて、静止及び習慣を現すものである。

論理上からのみ見れば、圖書の初歩は直線を畫くことから始むべきものゝやうに考へられる。實

際、在來の教授法といふものは、先づ直線から始めたもので、一般の練習には、二つの點を結び付ける直線を畫くことであつた、然しながら、進んで考へると、直線は決して自然的な線ではないので、如何なる美術家と雖も、完全な直線を畫くことは極めて稀である。故に曲線の方が寧ろ自然に近い線であると云はなければならぬ。それは腕の構造からして、曲線の方が畫き易い爲めである故に「濫塗」の如きは兒童の最も得意のものである。クック氏(Cooke)によれば、濫塗は兒童の自由精神の發動する結果であつて、自然なる行爲である。從つて大に價値のあるものである。そして兒童の畫く線は直線ではなくて曲線である。而も弓形のやうな半徑の短い圓の弧ではなく、徐かに圓出した、即ち半徑の極めて長い圓の弧である。それは腕の構造と運動とに影響される爲めであつた、生物本來の性質から來る自然の結果である。と論じて居る。實際に濫塗の場合には、腕全體の

運動が自然的に行はれるもので、氷滑のやうに滑かな表面を、急に運動することが樂で、のろ／＼動くことが不自然であるのと同様である。

六、圖畫發達期の區分

リニツケンズ氏は、兒童の圖畫科に就いて、非常なる用意を以て研究され、それから推して、圖畫發達期の徑路を四期に分つことが出來ると云つて居る。それは、(一)濫塗の時代、(二)藝術的錯感の時代、(三)自意識の時代、(四)青年期の時代である。此の四つの時期には、各々其の特長を有つて居るものであるから、少しくこれを説明しやうと思ふ。

第一期——は凡そ四歳から五歳までの間であつて、此の期は單に或る圖を畫くと云ふ動作、それ自身に興味を持つて居るもので、即ち繪畫の爲めの繪畫であつて、其の他に何等の目的も意識しては居ない。此の期には、濫塗の外には何

物も現はすことが出來ないけれども、然し濫塗の中には自分の全能力を發揮して止まないもので、其の産物は總て將來の才能を豫言するものである。

第二期——は約十二歳乃至十四歳までの間であつて、藝術的錯感、即ち想像の時代である。兒童は自分の頭に起つた想像を畫き出すことに満足して居て、自分の眼に映じた外界の事物を借りて來る必要を感じない時代である。故に此の時期は、殊に子供の自由に任せて置くことが必要で、若し此の發達期を無視して、徒らに或る一の型に導かうとするやうなことがあつては、大切な兒童の得意時代を破壊することになるので、圖畫楷梯の根本的缺陷と云ふべきである。今假りに、圖畫教師が子供に教へて、「よく樹や花を御覽なさい、そして見たまゝを御畫きなさい。」と云つたとする。子供は教へられたまゝに花なら花を見て、自分の頭だけでは、見たまゝ、

であると思つたことを書いたとする。そして其の作物が實物と非常に違つて居るといふことを知つた時には、自分の技巧の拙なさを耻ぢてしまつて、自分はもう何も書くことが出来ないものだと思へるやうになつて、書くことが嫌になる。それと同時に天賦の藝術的錯感が消滅して仕まう。で、要するに此の時期には、飽くまで兒童の想像を費んで、其の想像力を發達せしめるやうに努めることが必要である。

第三期は——十二歳若くは十四歳から、十五歳若くは十七歳までの間に、自意識の時代、又は批判の時代とも云ふべき時期である。然し思想發表の一方方法としての繪畫の妙味といふものは、自分の畫かうと思ふことを自由に畫くことの出来る子供だけに殘されて、他の普通の兒童は多く此の時期にあつて、其の妙味を失つて行くものである。そしてバーンズ教授の説に依ると、子供は十三歳若くは十四歳の後になつて、繪畫

の慾望が著しく増して來るものであると云ふことである。これは、疑なき事實であつて、圖畫擔當の教師も常に此の事實を實驗する處であらうと思ふ。

第四期——は青年期の時代である。獨創力の發生する時期で、兒童期の全盛時代とも云ふべき時である。而も製作に努力するといふこと自身が面白いのであつて、此處から専門に入ると否との境が生ずるのである。

七、視力

圖畫は一般に兒童の眼を害ふやうなことはないものである。然し視力の訓練は他の訓練よりも先に授けねばならない。何故と云ふに、色盲といふことは兒童の間に、屢々見る處であつて、歐米諸國の兒童研究家は、此の事實を證明して居る。亞米利加の小學兒童中で、色盲の男兒が四分強、女兒が六毛強の比をなして居ると云ふことであつ

て、其他多くの色覺研究會は皆、兒童の色盲が意外に多數なのに驚いて居るといふ有様である。

色盲には全然色の知覺を有たないものと、一の色と他の色との區別を付けることが出来ない色盲との二種がある。又、或る場合には色彩感覺の薄弱な兒童もあるが、然し全部の色盲といふものは極めて稀である。視力の研究は先づ色盲の研究から始めなければならぬ、此の點に就いては、此の小論文の中で盡すことが出来ないから、それは更めて論ずることとする。

八、器具

圖畫に用ふる器具は極めて簡單である。長い鉛筆若しくは畫筆と、適當な用紙と、それだけである。黑板の理想的代用品としては、白板の上を墨で書くことが、近頃になつて發明されて來た。石盤を使用する場合には、成るべく品質のよきものを撰び、且つ常に清潔にして置くことに注意せなければ

ばならぬ。

色「チヨーク」を使用する場合には、殊に十分の注意が必要である。色「チヨーク」の中に含まれて居る砒酸の有害分子に就いて、ドクトル、ガフキ（Guthrie）氏は恐るべき實例を示して居る。或る大學の一教授が病に罹つて、暫くの間職を退いて居て、漸く快復を見た。だが再び其の職に復すると、先きの病が再發したので、其の大學の教室を試験すると、教室の黑板に、色「チヨーク」で澤山の圖畫が書いてあつたので、いろいろ研究の結果、砒酸の中毒であることを發見した、尙ほ同氏の言に依ると、綠と、明るい青の「チヨーク」は砒素の分量が比較的薄く、樺、殊に薔薇色の「チヨーク」は極めて顯著な害毒を有つて居ると云ふことである。

手本を使用するといふことは、全く過渡時代の遺物であつて、聰明な教育家は、も早や手本などは使はない、若し強いて使はなければならぬ場合は

は、十分衛生上の點に注意して、(一)兒童の眼を傷けないこと、(二)餘りに細密な畫を書かない手本を撰ぶことが必要である。圖書の教育には、上來述べ來つたいろ／＼な目的の外に、清潔の習慣を養ふ方便としての利益もある。それは單に圖書の教室を清潔にして置くといふことばかりではなく、それと共に、標本なり、挿畫なり、鉛筆なりを清潔にして置く習慣をつけることも必要である。

九、表情と藝術の生理的價値

曩きに、兒童の感情を有りのまゝに外部に表すことが必要であつて、其の目的の爲めに立つて居る圖書の教育も亦、飽くまで子供の感情を表出する自發的繪畫でなくてはならぬと云つたが、それでは何故、さういふ習慣を付けることが必要なか、人間の感情を偽らずに表すといふことが、吾々の生活に、どういふ意味を有つて居るものであ

るかといふことを少しく論じて見やうと思ふ。然しこれは詳しく云ふと、藝術論なり、心理學上の感情論なりに涉らなければならぬので、反つて繁雜になる恐れがあるから、此處では極く大意をいつまんで、お話することに止めて置く。例へば、吾々の胸に鬱積した精神上の苦痛であるとか、怒りであるとか云ふやうな感情を、忌憚なく他人に語り明したり、又はそれを文章に書き表すことが出来れば、その爲めに心の苦みや怒りの情が、自然と消えて行くもので、俗に怒りばい人は冷め易いと云ふのは、即ち自分の感情を直ぐ外部へ現して仕まうから、後に残るものが少い爲めである。これに反して、さういふ手段をとることが出来な

いで、何時までも自分の思つて居ることを胸に溜めて居る人は、それだけ苦痛や怒りの時間が永い譯で、自然と自分の頭を痛めることが多いのである。それが極端にゆくと、病的感情になつたり、機能を害したりするやうになる。よしそこ迄にな

らないとしても、少くとも人間の性質を陰鬱な傾
向に導くといふことは疑ない事實である。

總て吾々の心に醜酔した藝術衝動を、詩であ
るとか、繪畫であるとか、小説であるとか、演劇
であるとか云ふやうな活動、即ち製作といふこと
で、自分の興奮した感情を發散せしめて、それに
依つて自分の藝術的満足を得ることが出来るの
も、前と同様の理由から出て居るものである。

獨逸の詩聖ゲーテが自分の内的煩悶から来る暗
黒な感情と、そして自分を滅ぼさうとする病的感
情と、生きやうとする生の執着心との間に起
る心の苦みを、詩作に耽ることに依つて、僅にそ
れを救つて居たと云ふことは、此の場合の最も適
切な實例であつて、ゲーテの作で有名な『ウエル
テルの悲』即ち其の結果である。之れは獨り
ゲーテに限られたことではなく、總て偉大な詩歌
は、皆同様の動機から出来るものである。

藝術品を製作するといふことから得る慰藉の内

容には、創作の完成された刹那の歡喜なり、自分
の作を社會に發表し得たといふ社會的本能の満足
なり、又は模倣の本能を満足すると云ふやうなこ
とが、前に云つた要素に附帶して居ることは、疑
ひのない點であるけれども、主な部分は感情の發
表から来る満足である、それであるからヒルン氏
(Hirun)の云つたやうに、總の藝術は自分の感情を
發表する必要から生ずるもので、飽くまで自分の
満足を得やうとする活動である。従つて藝術的價
値といふものは、藝術それ自身にあるもので、そ
の他に、例へば勸善懲惡の爲めであるとか、人
類の理想の向上を助ける爲めであるとかいふやう
な、他の方便として立つて居るものではないの
で、もう一步進んで云ふと、自分の満足の爲めの
行爲であるといふことが、やがて大なる教育的價
値を有つことになる。これは先きに云つた子供の
自發的活動が、それ自身に大なる教育的價值を有
つて居るといふこと、同様の理由である。

これは藝術を生理學上から見た議論であるけれども、この理論が同時に、子供の感情を有りの儘に發表する自發的活動を尊重せなければならぬと云ふ理論の説明にすることが出来るのであつて、これに依つて、子供の運動神經の訓練は、皆思想や感情の表出を助けるものでなければならぬと云ふことが理解されると思ふのである。

十、餘論

自發的の繪畫が思想や感情を發表する手段であるといふことは、一方から見ると、子供のそれに對する興味を具體的に表したものと見る事が出来る。又、さう云ふ思想なり、興味なりは自發的活動の中でも、殊に遊戯と圖畫の上に最もよく現はれるもので、これ兒童や、野蠻人や、狂人の畫いた自發的繪畫で十分に證明されるものである。或る場合には、習字や言語よりも、繪畫に依つて、さういふ人の腦裡に起つた現實の思想を知ること

が出来、又、男兒と女兒との間や田舎の子供と都會の子供との間には、一般の能力なり、智力なり、特殊な藝術的才能なりに、どういふ差異があるかといふやうなことも、これに依つて知ることが出来るのである。

圖畫が子供にとつて、思想や感情を發表する極く普通な手段であることは疑ひなき點であるけれども、然しそれと共に、紙細工であるとか、粘土細工であるとか、更らに轉じて、駢歩であるとか戲曲的な動作であるとかいふやうな、いろ／＼な形式でそれを表すものであることを忘れてはならぬ。唯、繪畫がその代表的な形式であると云ふに過ぎない。

要するに運動神經を訓練する方法なり、手段なりの撰擇は、一に子供の自由に任せて置くべきものである。(完)